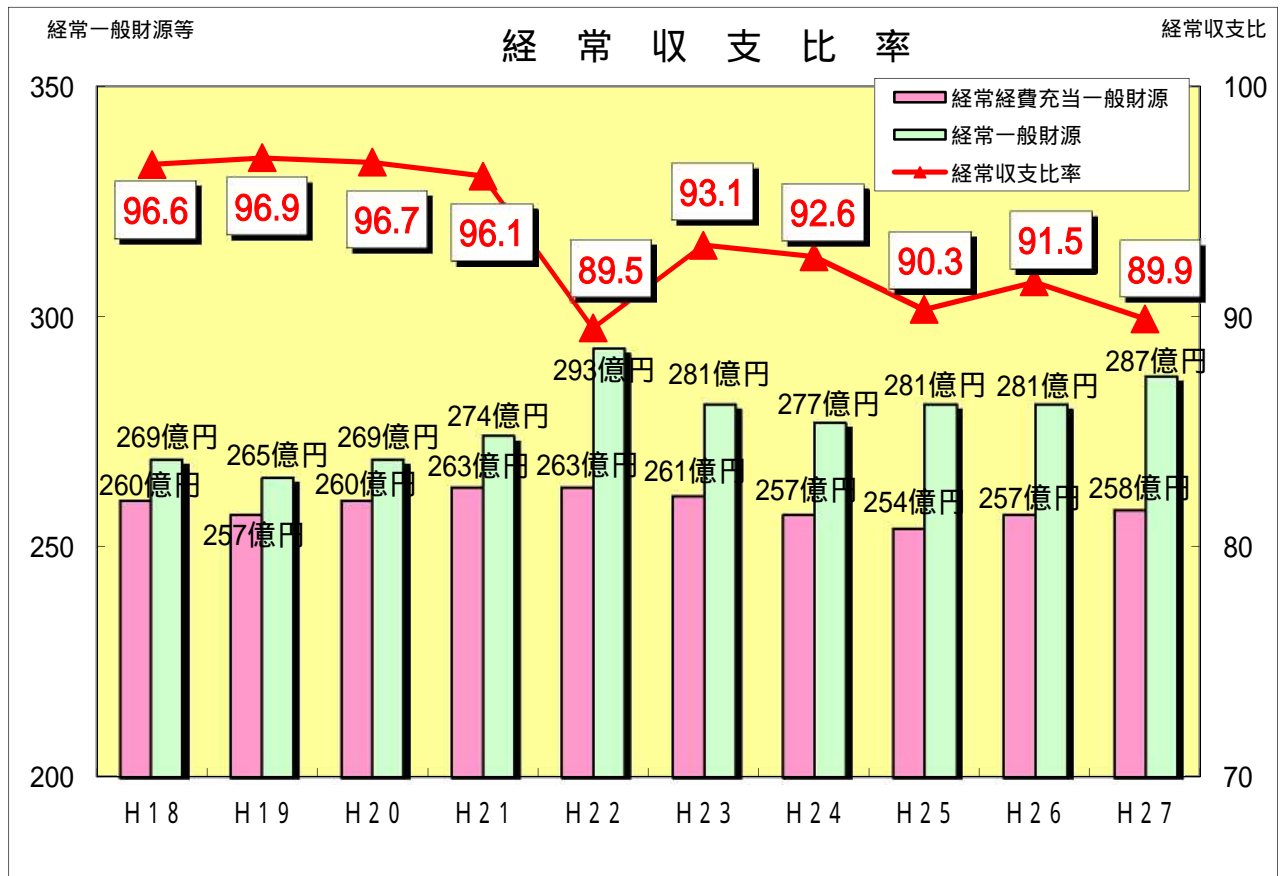


財政力指数とは？

地方公共団体の財政力を示す指標で、通常は3年平均値を使用します。

$$\text{財政力指数} = \frac{\text{基準財政収入額}}{\text{基準財政需要額}}$$

この比率が1以上になると地方交付税が交付されない不交付団体となります。三位一体の改革に伴う税源移譲などにより平成20年度までは上昇傾向にありましたが、以後、市税収入の減などにより下降に転じています。平成25年度以降は横ばいとなっていますが、引き続き地方交付税へ依存する割合が高くなっています。



経常収支比率とは？

分母

市税などの使途が特定されていない経常的な収入(経常一般財源)

分子

人件費、施設の維持管理費、扶助費などの経常的な支出(経常経費充当一般財源)

$$\text{経常収支比率} = \frac{\text{経常経費充当一般財源}}{\text{経常一般財源}} \times 100$$

この比率が高いほど、公共施設の整備などの建設事業を行うためのお金が少ないことを意味し、財政状況は硬直化しているといえます。

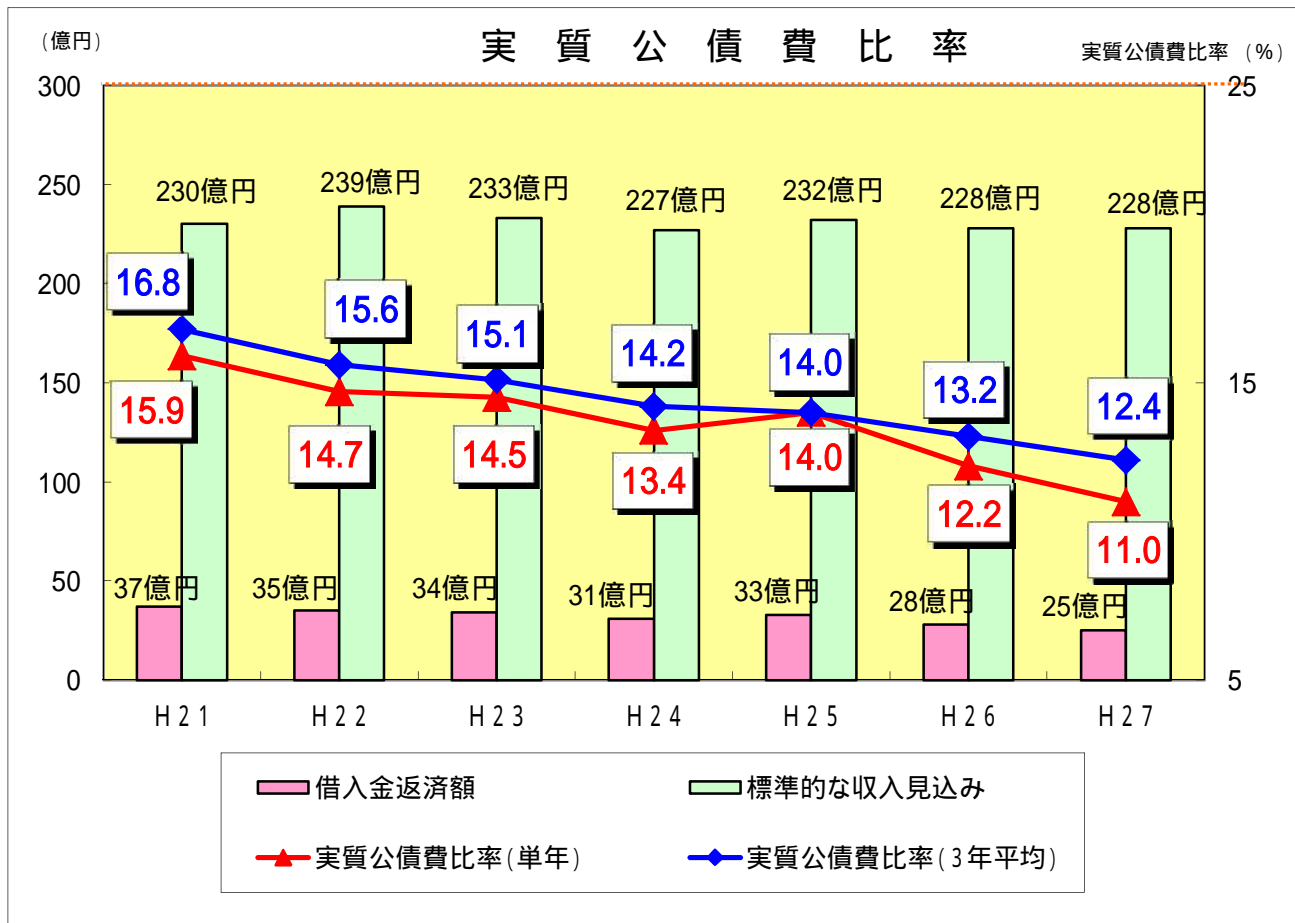
平成27年度決算の状況

平成27年度決算では、平成26年度に比べ1.6ポイント低くなりました。

【主な要因】

分母となる経常一般財源は、市税、普通交付税及び臨時財政対策債は減収となったものの、地方消費税交付金の増などにより総額で6.0億円の大幅増となったこと。

分子となる経常経費充当一般財源は、扶助費、繰出金など総額で0.9億円の増となったこと。



実質公債費比率とは？

平成18年4月に地方債制度が「許可制」から「協議制」に移行したことに伴い導入された指標で、これまでの普通会計に加えて、特別会計や一部事務組合への負担を含んだものとなっています。平成19年度決算からは、健全化判断比率4指標のうちの一つとなりました。

分母
市税、普通交付税などの用途が特定されていない標準的な収入見込み額から、普通交付税に算入された借入金返済額を差し引いた額

分子
道路・学校の建設などの財源とした普通会計の借入金返済のほか、水道・下水道など特別会計や消防などの一部事務組合の借入金返済など、市が負担した額から普通交付税に算入された借入金返済額を差し引いた額

$$\text{実質公債費比率} = \frac{\text{借入金返済額} - \text{普通交付税に算入された借入金返済額}}{\text{用途が特定されない標準的な収入見込み額} - \text{普通交付税に算入された借入金返済額}} \times 100$$

この比率が25%以上になると、早期健全化団体に位置付けられ、財政健全化計画を策定し、自主的な改善努力による早期健全化を図ることが義務付けられます。

平成27年度決算の状況

平成27年度決算では、平成26年度に比べ3年平均で0.8ポイント、単年でも1.2ポイント低くなりました。

【主な要因】

平成25年度から第三セクター等改革推進債の償還が始まったものの、これまでの市債発行の抑制などにより借入金返済額が減少傾向であることや、市債の発行においては交付税措置のあるものにするなど、後年度負担の軽減に努めてきた結果によるもの。

債務残高の推移

平成25年度

平成26年度

平成27年度

比較

地方債残高

・普通会計	695.1億円	733.5億円	737.3億円	3.8億円
・特別会計	408.7億円	399.8億円	392.9億円	6.9億円
・水道事業会計	84.1億円	80.8億円	76.2億円	4.6億円
計	1,187.9億円	1,214.1億円	1,206.4億円	7.7億円
(市民一人当り)	113万円	117万円	117万円)

債務負担行為現在高(公社金融機関借入分除く)

	55.3億円	53.5億円	50.7億円	2.8億円
--	--------	--------	--------	-------

都市整備公社借入分

	14.1億円	12.7億円	11.6億円	1.1億円
--	--------	--------	--------	-------

一部事務組合への津山市負担分

	30.7億円	53.1億円	80.9億円	27.8億円
--	--------	--------	--------	--------

津山市債務合計

	1,288.0億円	1,333.4億円	1,349.6億円	16.2億円
(市民一人当り)	123万円	128万円	131万円)